
漆黒の魔王

新明 聖凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の魔王

【Nコード】

N3159K

【作者名】

新明 聖凰

【あらすじ】

2010年。俺の名前は神武空真。通称「魔王様」。この日本を潰すため下僕と共に歩む物語。一体様々な人物と出会い、対峙すること何思うのか？

第一話：魔王誕生

西暦2010年。日本国で、ある計画が実行されようとしていた。

俺の名前は神武空真^{じんむ あくま}。20歳になったところ。しかし、バイトもせず、大学にも通っていない。しかし、ニートではない。かと言ってフリーターでもない。中途半端なのだ。俺は今、人探しをしている。俺の計画を手伝ってくれる人間を…。

俺は兵庫県で生まれ育った。一般的な一軒家で両親と3人で幸せに暮らしていた。しかし、幸せというものは長く続かない。

俺が15歳のある日、父親の会社が倒産し、路頭に迷うことになった。それでも両親は、必死に頑張っていた…ように見えた。しかし、見えていただけなのだ。実際、両親は様々なところからお金を借り、それをギャンブルに注ぎ込んでいた。そうになると、結果は見えてくる。

両親は、俺を置き去りにして逃げた。俺は純粹だったため、いつまでも親の帰りを待った。しかし、2日、3日と過ぎていくうちに、気付いた。俺は捨てられたのだと。

俺は、親戚もいなかったので、ある所に行った。そこは施設。親のいない子ばかりが生活しているところ。施設の人間は優しく迎え入れてくれた。そして俺は、何の抵抗もなく、受け入れた。実際俺に帰るところは無いのだから。

そこから、俺の第二の人生がスタートした。しかし、そこでの生活は酷いものだった。施設の仲間に虐められた。その原因は、暗い雰囲気と『あくま』という名前らしい。虐めた奴が言っていた。あく

まゝ悪魔と結びつけたのだろう。なんて幼稚なんだ。施設の人は、見て見ぬ振りをする。なぜ助けてくれない？といつも思っていた。そこから、俺は純粹ではなくなった。しかし、純粹でなくなること
で力を手に入れた。元々、不思議な力は持っていた。物を念で動かしたり、予知夢を見たり。魔的な能力へと変化したといった方がしっくりくるかもしれない。内なる力が開花したのだろう。だが、あまりにも力が強すぎたため、コントロールがうまくいかない。いじめにきた生徒を能力で壁に叩きつけたりした。

もちろん初めは自分の意志だが、一旦力を解放してしまうと抑えることができなかった。そんな俺の能力を怖がり、誰も近づくことはしなかった。施設側も追い出したいのだが、殺されるかもしれないという危惧があるのか、不干渉でいる。まあ1ヶ月も経つ頃には能力を自分のものとしていたが…。

初めは俺を頂点にした組織（いじめの集団）が作られたが、俺が興味がないことを知ると1人また1人と減っていき、最終的には俺は孤独になっていた。

施設に住んで、半年が過ぎたある日、1人の少女が入ってきた。名前は影宮真澄^{かげみやますみ}。年は確か、俺より2つ年下だったと思う。つまり13歳か？髪は透き通るような黒で、前髪が眉毛の上辺りで揃っている。肌は白色で、陶器のようだ。口は一字に結ばれ、話せないのかと思わせる。しかし、目だけは力強く、そして美しかった。

やはり、この子も虐めにあった。虐めが、通過儀礼のように思えてきた。しかし、俺は無関心でいつもいじめられる真澄を見ていた。真澄はどれほどいじめられても力強い目だけは変わらなかった。俺は段々真澄に惹かれるようになった。なぜかは分からない。自分と重ねてしまったのだろうか？俺は、いじめられている真澄を助けることにした。力は使わずに。なぜ、力を使わないのかって？あんな

虫けらに神聖な力を使うのはもったいない。それに自分のものにした力を使う相手はもう決めてある。

中庭のベンチに腰掛、俺は自分の掌を見つめる。

「有難う御座いました」

「いや、別に。俺も虐められたから良く分かる。もう虐められないだろう」

「……………」

真澄はジッと俺を見つめる。綺麗な瞳だと思ってしまう。

「どうした？俺何か変なことを言ったか？」

「いえ……」

「何かあるならはつきり言え」

「あなた様は、強大なお力をお持ちですね？」

「……………いつ気付いた？」

「初めから」

「…そうか。俺の力のことがわかるということはお前も何か能力を？」

「ええ、あなた様程では御座いませんが。刀さえあれば、一瞬で切

り倒すことが出来ます。これが私の刀です」

真澄は真っ赤な鞘の刀を見せた。この国では帯刀が許可されている。街を歩く人のほとんどが帯刀している。変な社会だと思うか？総理大臣が大の刀好きで帯刀してもいいという法律を作ってしまったのだ。そういうわけで、刀は必須アイテムになった。子供のお小遣いでも買えるものもある。だが、真澄の刀はかなり値が張りそうだ。

「へえ」。どうして施設に入るほどの者が、そんな高そうな刀を？」

「これは父の形見です。父は会社の社長だったのですが、連帯保証人になってしまい一文無くなってしまいました。それで父は自殺し、もともと母親のいない家庭でしたので、この施設に来ました。今思えば、あなた様に会うためにここに来たような気がします」

俺はじつと真澄の話に耳を傾けていた。春のにおいを告げる風が優しく頬をなでる。

「もう春か…。なあ、一緒にこの日本を潰さないか？」

これはずっと俺の心の奥底にあったことだ。いつやろうかとずっと考えていたが、今しかないと思う。

「私はあなた様の下僕となりましょう。そして、あなた様の夢を実現できるよう、命を懸けて御手伝いさせていただきます」

真澄は予期してたかのように即答した。

「いいいだろう、日本の潰れる様を一番近くで見せてやる」

「はい！」

真澄はこの施設に来て初めて笑った。

「これから、俺のことは魔王様と呼べ。名前が『あくま』だからな」

「仰せのままに」

こうして、運命の歯車がゆっくりと回転しだした。

第二話：静香

「あれから早5年か。人生とは儚いものだな」

「そうですね。しかし、私のサタン様に対する忠誠心は永久に不滅です！」

「勝手にしろ」

俺たちはあの日から、今後どうするかについて話し合った。と言っても、ほとんど俺の命令だが。まずは資金調達をさせた。それは、早く施設から脱出するため。目標は、数億円だった。金というものは、なかなか集まらないのが普通。だが、1年で6千万くらいだったかな？と言うことは、5年で3億。結構集まった。

真澄は凄い奴だ。俺は、『合法的な手段で金を集める』と言っただけだ。投資でもしたのだろう。おそらく。まあ、そんな投資金がどこから調達したとかは関係ない。今、ここに金があれば良いのだから。ただ、これだけは聞いた。

「もしかして、体を売った訳ではないだろうな？」

「気になります？魔王様にしては珍しいことですね。心配なさらないで下さい、魔王様以外のゴミ虫には、興味ありません」

「そうか。」

俺はどうしたのだろう。こんな気持ちは初めてだ。しかし、これを顔に出さないのが俺だ。ニヤニヤしていたら、指揮を執ることは出

来ないからな。

「魔王様、これからどうなさいますか？」

「施設を抜け、下僕を集める」

「では、いよいよですね」

「そういうことだ。真澄、家の手配をしろ。俺は、ここの理事長に挨拶してくる」

「御意！」

俺は理事長室へと向かった。理事長室は正面入り口を入り、右手に事務室があるが、その奥だ。

コンコン。

「どうぞ」

「失礼します」

そこには恰幅がよく、細い眼鏡をかけた女性が座っていた。この人がこの施設の責任者。いかにも理事長という名前にふさわしい、金の亡者のような顔立ちだ。

「あら、神武君どうしたの？」

「実は、今日限りでここを出ることにしました。真澄と一緒に」

理事長は待つてましたといわんばかりの笑顔で聞いた。

「大丈夫？まだここに居てもいいのよ？」

嘘だ。こいつの話すことは嘘、嘘、嘘ばかり。腹のそこにあつた怨念とも言つべき感情がふつふつ沸き上がってくる。

「まあ神武君がそう言うのなら仕方ないわね」

俺がまだ返事をしないうちにさっさと納得している。本当に呆れてものも言えない。

「でも、お金や住む場所はとうするの？」

「それなら大丈夫です。3億ほどありますから」

「な、何ですって？さ、3億！！どうやってそんな大金を…」

このことには本気で驚いているようだった。予想はしていたが。

「それは内緒です。ご心配なさらずに、違法なことはしていませんから」

理事長は何事かを考えていた。そして、

「そのお金は没収します」

突然の発言だった。理事長は笑顔でそう言い、そのお金を何に使うか考えているようだった。

「はあ？」

「これは、理事長命令です」

「なぜあんたに渡さなければいけないんだ？」

怒りの沸点までもう少し。

「施設にいる間は、私のルールに従ってもらいます」

俺は言うべきではなかったと後悔した。しかし、今からあれこれ考えても仕方がない。それに俺の能力で一番に消す奴はもう決まっている。そう、こいつ。どうやって消すかな？そう考えていたところ、誰かが来たようだ。

コンコン。

「はいどうぞ」

「失礼します」

「あら、ちょうどいいところに来たわ。影宮さん、神武君とここを出て行くそうですね」

理事長は真澄に微笑みかけた。問題児が2人も減ることに安堵している様子。

「はい、それが何か？」

真澄は至って冷静。

「出て行くのは構わないけど、あなた達が稼いだ3億円は没収させて頂きます」

「しかし、ここの規則では、自由にお金を稼いでも良かったのでは？」

「あつ、その規則はさっき無くしたの。これからは禁止にしますってね」

「どうやらいくら話しても無駄のようですね」

真澄は理事長の性格（一度決めたことは絶対に覆さない）を見抜いた。

「物分りが良い子ね。あなたのそういうところ好きよ」

「私は、あなたのそういうところ大嫌いです」

真澄は少し睨みながら言った。少し重い空気が部屋を流れる。

「はい、これで話はお終い！じゃあ3億置いて出て行ってちょうだい。どこにあるの？銀行？それとも部屋？」

理事長というお面を被った醜い化け物の本性を見た気がした。

「真澄下がれ」

「御意」

真澄はドアの近くまで後退。それに対し、俺は理事長の前まで前進。

「な、何なの！警察呼ぶわよ」

「ふっ、警察とは」

俺は自分の力を解放した。すると、俺の手の周りに黒い渦が発生した。その渦はどこまでも黒く、何もかも飲み込みそうなほどだった。その漆黒の渦は大きく膨れ上がり、理事長の頭から飲み込んだ。数秒後、黒い渦が晴れると、そこには理事長の姿はなかった。

「これが俺の力。しかし、一部だがな。どんなものでも一瞬で消す。どうだ、真澄？」

「すばらしいです！さすが我が主。私もその渦に包まれない…。でも、包まれたらお役に立てなくなるし…」

真澄は真剣に悩んでいる。

「……。1つ言っておく。俺は消す相手を選べる。つまり、包んでも消さない事もできる」

「包まれたく御座います！！」

「また今度な」

「はい！」

俺たちは、真澄が手配した我が家へと向かった。真澄が手配した家は、都市部の高台にあり、とても広く、豪華だった。外見は西洋風

の貴族屋敷。壁が白色で屋根が青色。2階建てだが部屋が何個あるのか検討もつかない。2人で住むには広すぎる。だが、これから日本を潰そうとする者はこれではまだ小さいかもしれない。

「どうやってこんな家を？3億では足りないだろ？」

「実は、あなた様の力になりたいと申し立てている者がいまして。その者が、提供してくれたのです」

この広い世の中には物好きもいたものだ。庭もきれいに整えられている。犬と追いかけてくっことをしている少女がいてもおかしくない。

「ほ。でも、そいつとはどこで？」

「ついさっきです。詳しいことは、その者を交えて御話致します」
俺たちは、玄関を抜けると扉の前で立ち止まった。すると、ドアが勝手に開いたではないか。凄い家だと感心していると、1人の女が開けていた。何だ…期待して損した。

「お帰りなさいませ、魔王様、真澄様。」

その女は、黒のゴスロリを身に着け、メイドの格好をしていた。まさか…こいつがこの家を提供？

「静香、話があるから、応接間にいらっしゃい」

真澄は長年この家で暮らしてきたかのように静香という少女？に声をかけた。

「かしこまりました」

見回すと、シーンとした屋敷だ。豪華な屋敷なのにどこか寂しい感じがする。

「では、魔王様、こちらです」

事前に静香に部屋の間取りを聞いたのだろう。真澄は迷うことなく一室へと向かった。そこは、応接間と呼ぶに相応しい場所だった。トラの剥製や訳の分からない絵画が所狭しと飾られていた。俺はソファに腰掛、静香が来るのを待った。真澄は、俺の横に立っている。

「真澄も座れ。じゃないと話しづらい」

「分かりました」

真澄は俺の隣に腰掛ける。

コンコン。

「失礼致します」

家の者がノックをするとは…。

静香は、お盆の上にコーヒーと紅茶を載せてやってきた。そして、俺の前にコーヒーを、真澄の前に紅茶を置いた。

「有難う」

「いえいえ、滅相も御座いません」

静香はそつと俺の前に座った。

「では、もしかして静香がこの家？」

「はい、それで御座います」

「そうか、まずは礼を言わなければな。感謝している」

「……そ、そ、そんな」

静香は上手く舌が回らないようだ。首と手をブンブン振っている。

「では、私から説明させて頂きます」

真澄が俺の目を見て話す。

「頼む」

「まず、静香と出会ったのは先程。私が不動産屋に行く時です。この家の前を通り過ぎようとした時、この子が門から飛び出して来ました、青い顔をして。只ならぬ雰囲気を感じましたので、私は静香と話すことにしたのです」

「それで？」

「静香は、お嬢様として育ちました。しかし、両親の虐待が激しく、いつも世界を恨んでいたそうです。段々と虐待がエスカレートし、刃物で殺されそうになることもしばしば。そして今日、本気で殺されると思い、逃げ出して来たという訳です」

「成程、ずいぶん辛い目にあっただんな」

「はい…。私は誰かに助けて欲しかったのです。警察に言ってもお金で解決され、どうしたら良いのか分かりませんでした。真澄さんに会って、話をして、魔王様は凄い力の持ち主で、世界を変えて下さると聞きました。私は、魔王様のお役に立ちたいと思います。どうか私をあなた様のメイドにしてもらえないでしょうか？」

「断る！」

俺は真剣な顔で答えてやった。

「えっ…！？」

「とは言えないな。宜しく頼む」

静香は一瞬何とも言えない表情をしたが、すぐに笑顔へと変わった。初めは本当に断るつもりであった。一般人を参加させるのはどうかという気持ちがあったからだ。だが、静香のまっすぐな姿勢とこの家の財力に興味があった。

「ところで、その両親は？」

「実は、リビングに監禁しております。」

「真澄にしては珍しい。すぐに消さなかったんだな」

「はい、魔王様の意見を伺おうと思ひまして」

「まずはその両親に挨拶と行こう」

3人はリビングへと入った。そこでは、手足をロープで縛られ、口

にはガムテープが巻かれている静香の両親が壁にもたれ掛っていた。

「うぐっ、うー、んー」

何を言っているのか分からない。分かったところで意味も無いが…。

「さて、静香、どうする？」

「消して下さい」

即答だった。静香の目に迷いはなかった。親であれば、普通迷うだろう。よっぽど酷い目にあったのか。

「良いのか？」

「はい！私は魔王様について行きますから」

「後悔はしないか？」

「はい！」

「分かった。ところで、お前たちは何か言い残すことは無いか？」
そう言いながら、俺は2人分のガムテープを外した。

「し、静香ちゃん！ごめんなさい！私たちが悪かったわ。ね、許して！お願い！」

「静香、私は愛情で教育していただけなんだ！だから、頼む！助けてくれ！」

両親は目をウルウルさせながら、静香に懇願した。それに対して、
「……。あなた達は誰？私の知っている人？私は知らない。早くこの世から消えて」

薄情なまでの眼差し。

「静香ちゃん…」

「静香…」

2人は予想外の展開に口を開けている。見事なまでの静寂。

「こうなったら大声で叫ぶわよ！」

「お、おう！」

自分たちにのしてきたことはもっと酷い事なのに、自分のおかれた状況が逆転すると何としても生き残ろうとあがく。これが人間というものの本性なのだろう。

「醜い奴らだな」

俺は2人の目を見つめた。俺の瞳が赤く染まると、

「か、かは、がっ」

静香の両親は、苦しそうにしている。口の端から唾液がたらたらこぼれる。目はだんだんと充血してくる。

「これで、大声で叫ぶことは出来まい。」

そして、俺は、右手に刀をイメージした。すると、刃までもが真っ黒な刀が出現した。

「静香、これを貸してやる。これで止めを刺せ」

「仰せのままに」

静香は、ためらいもなく2人の心臓に刀を突き刺した。2人の体は見る見るうちにその刀に吸い取られていった。両親の最後の顔は恐怖に満ちていた。

「すごい！これが魔王様のお力…」

「ほんの一部だな」

「言ったとおりでしょ」

「はい！」

こうして、この家は正式に俺の物となったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3159k/>

漆黒の魔王

2011年1月13日17時30分発行